

テルミン氏生誕100年を迎えて
～ロシアに於けるテルミンの昨日、今日～

竹内正実
テルミン研究・演奏家

筆者は1993年からモスクワに渡り、テルミンのレッスンと、ロシアで得られるテルミンに関する情報の収集に従事している。これまでほとんど紹介されることのなかったロシアに於けるテルミンのありようについて、ロシア滞在中に得られた情報をもとに、紹介することにする。また、発明者であるレフ・テルミン氏の生誕100年を記念して開催されたワークショップ、"Theremin days"についても報告する。

On the 100th Anniversary of L. S. Theremin's Birth
--- Todays and Yesterdays of the Theremin in Russia ---

Masami Takeuchi
Theremin investigator and player

I have been in Russia since 1993 for the purpose of receiving a Theremin lesson and collecting information about the Theremin, which would be obtained here in Russia.

Based on the information I got during my stay in Russia, I will introduce here the present state of the Theremin in Russia, which has hardly ever been introduced.

I will also make a report on the workshop entitled "Theremin Days" which was held in celebration of Lev Theremin's 100th birthday, who was the inventor of this musical instrument.

はじめに

最近、何かと話題にのぼることの多い、電子楽器”テルミン”。この最も古い電子楽器に向けられる関心の高まりは、近年日本においても見受けられ、その音色や発音の仕組み、演奏方法、発明者であるレフ・テルミン氏の辿った数奇な運命など、より深く、広範に紹介されるようになった。ただ、ステイヴ・マーティン監督のドキュメント映画「Theremin: an electronic odyssey」や、ロバート・モーク氏製作の現代版テルミンなどに代表されるように、我々が耳にする情報の多くはアメリカを発信元としているのが現状だ。実際、レフ・テルミン氏の97年に及ぶ長い人生において、もっとも輝かしい時間を過ごしたのはアメリカであり、アメリカは今もって彼を評価している。そうした国から情報が送り出されるのはもっともなことではあるが、彼の祖国であるロシアにおける、テルミンをめぐる現状についてあまり知らされることはない。”壁”のなくなった今もお、ロシアは”遠い国”なのである。

筆者は1993年より、レフ・テルミン氏の愛弟子であり血縁のテルミン奏者リーディア・カヴィナにテルミンを師事している。モスクワ滞在中に知り得た、ロシアにおけるテルミンの有りようについて、また、今年1996年はテルミン氏生誕100周年にあたるが、これを記念して開催されたワークショップ”Theremin days”についても報告したいと思う。

テルミン、レフ・テルミン

まずはじめにテルミン、そして発明者であるレフ・テルミン氏について触れておきたいと思う。

テルミン (Theremin・Thereminvox) はロシアの科学者でありチェロの名手でもあった、レフ・セルゲイビッチ・テルミン氏によって1920年に発明された、世界でもっとも早い時期に生まれた電子楽器である。1921年10月5日、第八回全ロシア電子技術会議において発表され¹⁾、驚

愕したジャーナリスト達により、”Thereminvox”(voice of Theremin) と命名された²⁾。テルミンの最大の特徴は、鍵盤も弦もマウスピースも用いず、ただ自由な両手の動作によって、楽器に触れることなく演奏できるところにある。オリジナルのテルミンは、垂直・水平アンテナを有しており、右手を垂直アンテナに近づけるとピッチが上昇し、水平アンテナから左手を遠ざければ音量が増す。この両手の動作の組み合わせで演奏するわけであり、演奏方法自体はいたって単純である。ではどの様にしてそのような演奏方法が可能となるのか、発音原理について簡単に説明する。二つある高周波発振器のうち、一つは周波数が固定されており、残る一つはアンテナにつながれていて、演奏者とアンテナの間に生じる電気容量に応じて周波数が変動する。演奏者の手がアンテナに近づくと電気容量は増し、発振器の周波数は低下する。これら二つの周波数の差から発生する”うなり”から実際の可聴音を取り出すものである。

単音楽器(後にテルミン氏によって和声テルミンも作られるが、基本的にテルミンは単音楽器)。発音域はモデルによって様々で、4~7オクターブをカバーする。音色も機種によって多少の差があり、倍音の含み方が少ないものは女声のような、倍音の比較的豊かなものはチェロに似た音色の印象を与える。



写真1：テルミン (リーディア・カヴィナ所有)

テルミンの発明者であるレフ・セルゲイビッチ・テルミン氏は、1896年、サンクト・ペテルブルグ生まれのロシア人。アルビジョア派（中世、カトリックに異を唱えた宗教上の異端派）信徒を先祖に持つ、古いフランス貴族の家系。1527年の聖バーソロミュー祭の夜（パリのカトリック教徒による新教徒の大虐殺）等の迫害から逃れ、ロシアに帰化した³⁾。

裕福な法律家の家に生まれたテルミン氏は、早くから科学者としての才能を開花させ、大学では物理学と天文学とを専攻し、同時に音楽院のチェロ科にも入学した。1921年、第八回全ロシア電子技術会議においてテルミンを発表。彼の発明はレーニンの関心を引き、クレムリンに招かれた。テルミン氏はレーニンの手を取り、4本の手でグリニカの「ひばり」を試奏したという⁴⁾。レーニンはすっかり気に入って、テルミン氏の発明は彼のスローガン「共産主義とはソビエト権力と全国土の電化である」を実践するものとして、ソ連各都市でのデモンストレーションに遣わされた。

彼の発明はこれにとどまることなく、1926年には動画テレビジョンシステムの公開実験を行っている。この装置はソビエト首脳部のメンバーを魅了し、国境警備に用いる考えがすぐさま提案された。テルミン氏も同意したが、おかげでこの発明はその場で極秘扱いとなり、ロシアの百科事典にはテレビジョンの項目にテルミン氏の装置について何一つ言及されていない⁵⁾。

1927年、ソビエト電化計画の成果のデモンストレーションのために、テルミン氏はフランクフルトの世界音楽博覧会を皮切りにヨーロッパ各地へ遣わされ、その後ニューヨークへ渡る。帰国までの10年間、スタジオを開き、RCA社等とテルミンの製造契約を結び、精力的なプロパガンダ活動、著名人との交友など、アメリカ合衆国でのテルミン氏の生活は成功の連続であった。

1938年、ある日突然、テルミン氏の姿がニューヨークの街から消えた。これには諸説あって、NKVD（内部人民委員部）により拉致された

とも、自ら望んで秘密裏に出国したとも云われている。その際、テルブシトン（別名ダンスプラットフォーム、テルミンの理論を応用した、ダンサーの身体全体の動きによって音楽を演奏する装置）を操る、テルミン氏の弟子であり、また後に妻となった、黒人ダンサー、ラヴィーナ・ウィリアムスと離ればなれになる羽目になった。ニューヨークのソ連大使館で正式に婚姻の手続きをし、テルミン氏より少し遅れてロシア入りする確約までとりつけていたが、結果的にラヴィーナにソ連入国ビザはおりず、二人はこの後二度と出会うことはなかった。

帰国したテルミン氏を待ち受けていたのは成功者への祝福ではなく、スターリンによる粛清の嵐であった。謂れのない、祖国に対する裏切り行為と、キーロフ暗殺計画参加の嫌疑で、8年の刑期が言い渡され、シベリアへと送られた⁶⁾。1946年、テルミン氏は監禁から解放されたが、MGB（国家保安省、後のKGB）研究所の主任として働き続けていたので、世界はあいかわらず彼のことを何も知らなかった。西側社会では、姿を消した1938年に、テルミン氏は亡くなったものとされていたのだ。

完全な釈放が訪れたのは、1964年のことであった。テルミン氏すでに68才。四半世紀にもおよぶ監禁生活の後の、やっと手にした自由。モスクワ音楽院の音響研究室に職を得、再び“創造”に従事することのできる環境を手に入れた。1967年、ニューヨークタイムス紙のスクープにより、世界はテルミン氏の生存を知り、そのことによりテルミン氏は職を失った。過去にKGBと関係のあった、暗い過去を持つ者を音楽院の首脳部は受け入れるわけにはいかなかったのだ。“創造”は廃棄処分になれ、テルミン氏はモスクワ音楽院を追い出された。

その後は彼の旧友の助けにより、モスクワ大学内に職を得た。機械技師として昼間は大学で働き、夜は狭い、極貧層の住むモスクワ市営共同アパートで自身の仕事に取り組んだ。

1989年、テルミン氏はフランス・ブルジュ

市の名誉市民に選ばれ、1991年、スタンフォード大学開校100周年記念の際、テルミンの発明に対しメダルを授与された。この時テルミン氏は、実に半世紀ぶりにアメリカの地を再び踏んだことになる。1993年の1月にはハーグで開催された国際シンポジウム“シェーンベルクとカンディンスキー”において、アカデミー称号が送られ、世界は再び熱狂と敬意をもって彼を迎えた⁷⁾。名誉は再び外国からやってきた。この頃のテルミン氏の生活は、複雑な家庭事情から、とても90才を越える老人が耐えうるようなものではなかった。終生保ち続けた、衰えることのない創造への熱意と楽天主義、寛容な心持ちによってこそ、この波乱の人生を乗り越えてこれたのだろう。

1991年3月、ソ連邦崩壊の数カ月前、95才のテルミン氏は共産党に入党した⁸⁾。今までも幾度となく入党を申請していたが、ようやく許可が下りたのだ。彼はレーニンを生き返らせることを夢見、晩年には問題解決の糸口を見出しつつあったという。

1993年11月3日、一人の人間が成し得たとは信じがたいほどの、多くの仕事を残してテルミン氏は逝った。享年97才。

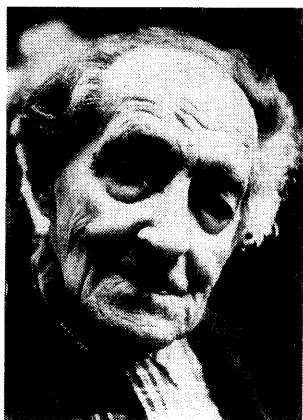


写真2：レフ・テルミン（生前最後の写真）

もうひとつのテルミン

テルミンは両手の動作によって演奏すると前述したが、ロシアにおけるもう一つのテルミン、“カヴァリスキーテルミン”は少々それとは趣を異にしている。コンスタンチン・カヴァリスキー氏はレフ・テルミン氏と同時代を生きた音楽家で、1920年代からおよそ50年間、ロシア各地において精力的なコンサート活動を続けた。右手とアンテナとの距離によって音高を定める点については、レフ・テルミン氏のテルミンと同様であるが、それ以外の部分において彼のテルミンはまったくの別物であるといえる。椅子に腰掛け、フットペダルによって音量を制御する。速いパッセージやスタカートを得不得手としていたレフ・テルミン氏のテルミンに対し、左手により操作される複数のトリガースイッチを連打することによって、瞬間的な発音・遮断を可能にしている。音色に関しても独自の思想が色濃く反映されており、一つの音色しか持たないレフ・テルミン氏のテルミンは、カヴァリスキー氏にとってつまらなく感じられ、既存の楽器の音色をもとめた数種類の音色が選択可能になっている。また、カヴァリスキー氏はテルミンの音色に残響を必要不可欠なものとし、スプリング式の残響付加装置を本体に内蔵している。彼の設計思想を引き継ぎ、更に新たな技術によって改良を加えているのが、レフ・カラリョフ氏である。テルミン演奏上もっとも困難とされるのは、演奏の拠り所を演奏者の“耳”にししか求められないところにあるが、彼はこの問題を鍵盤型のディスプレイ装置によって解決しようとしている。演奏者は現在自分が出している音が正確に音階上に位置しているか、これにより視覚によっても確認することができる。

カヴァリスキー・テルミンの奏者の、ゾーヤ・ラネフスカヤ＝ドゥギナ氏が指導するテルミンスクールが1985年より開校している。テルミンの演奏法を教授する機関としては、唯一のものと思われる。

楽器に対する考え方もさることながら、演奏活動においても“オリジナル”テルミングループとは一線を画している。テルミンの持つ可能性を引

き出そうと、いわゆる現代曲を精力的に作曲・演奏する”オリジナル”テルミングループに対し”カヴァリスキー”グループは、あくまでも既存のクラシック曲に演奏を限定している。

ゲオルギー・パヴロフとヤロスラフ・シェルクノフ両氏の製作するテルミンは、レフ・テルミン氏のテルミンの流れを汲むもので、テルミン演奏家リーディア・カヴィナ氏の監修に基づき、その長い演奏活動から得られたノウハウが随所に活かされている、現代版ロシアテルミンである。演奏法はオリジナルと同様、右手で音高、左手で音量を制御するが、音量の制御に電磁波を用いておらず、このことによって、より安定した音高制御を可能にしている。音色は晩年のレフ・テルミン氏製作のテルミンの音色に似た、柔らかな倍音の含みの少ないものである。数あるテルミンの中でもっとも広いと思われる、7オクターブの発音域を有し、音声主出力、モニター出力の切り替えが、左手の動作（楽器には非接触）のみで可能。携帯性にすぐれた軽量、コンパクトなボディーは、演奏者自身による楽器搬送を容易なものにしている。現在、さらに改良を加えた次期モデルの製作中。

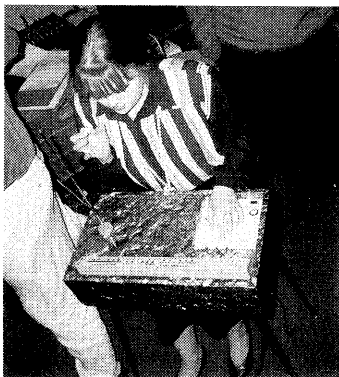


写真3：カヴァリスキーテルミン

ロシアンテルミニスト

ロシアのテルミン奏者といえば、レフ・テルミン氏の娘であるナターリア・テルミンが西側社会

では有名だが、近年、ロシアにおいて彼女が出演する機会は稀である。

レフ・テルミン氏の愛弟子であり血縁のリーディア・カヴィナ氏は1967年生まれ。9才からテルミンのレッスンをレフ・テルミン氏から直に授けられる。1992年、モスクワ音楽院卒業。現在までに、ロシアを始め欧米各地のコンサート、テレビ、ラジオ等の出演回数は400を越す。最近の主な活動としては、ハンブルグ”タリアシアター”でのミュージカル「ALICE」（演出：ロバート・ウィルソン、音楽監督：トム・ウェイツ）にオーケストラメンバーとして参加（1992・'94）。ティム・バートン監督の映画「Ed Wood」のサウンドトラックに参加（1994）。テルミン教習ビデオ「Mastering the Theremin」にインストラクターとして出演（1995）、等。また、彼女自身、テルミンのための楽曲を多数制作している。

オリガ・メラニチ氏は前述したカヴァリスキーテルミン奏者。1988年からゾーヤ・ラネフスカヤ＝ドゥギナ、レフ・カラリョフ両氏にテルミンを師事している。

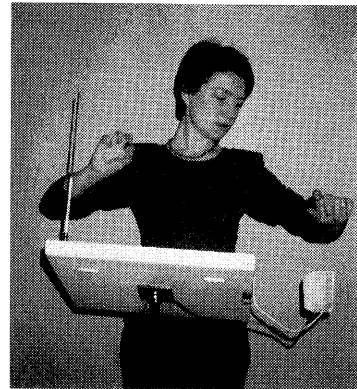


写真4：リーディア・カヴィナ

その他、テルミンの追隨者たち

国立モスクワ音楽院内には、かつてレフ・テルミン氏自身が働いていたところの電子音楽スタジオ、”テルミンセンター”がある（所長：アンド

レイ・スミルノフ、1992年創設)。テルミンに関連したことに限らず、ゼミナールや電子楽器を中心とした楽曲制作等の活動を続けている。

サンクトペテルブルグのヴィチェスラフ・マクシーモフ氏は幼児のための音楽教育機関“トニカ”を組織し、テルミンを幼児の音感形成教育に利用し効果を上げている。

タタルスタン共和国の首都カザン在住のプラト・ガレーエフ氏は、色彩と音楽の融合に携わる、デザインオフィス“Prometei”の主催者。テルミン氏との交友は30年に及び、テルミン氏に関する論文を多数発表している。1995年、その集大成といえる「Soviet Faust - Lev Theremin : pioneer of electronic arts」を発刊した。また多数所有するレフ・テルミン氏の映像資料をまとめたドキュメント映画、「Soviet Faust」の制作準備中。

レーリフ博物館のセルゲイ・ゾーリン氏も、前述のプラト・ガレーエフ氏同様、色彩と音楽の融合を探っており、テルミン氏との交友も深い。その長いテルミン氏との交友の中から知り得た様々な事実をもとに、彼の人生をテーマにした長編小説の出版を計画している。まずイギリスで、その後ロシア国内での出版が予定されている。

Theremin days

今年1996年はレフ・テルミン氏生誕100周年にあたり、彼の祖国であるロシアにおいても、11月14日から19日にかけて、記念ワークショップ、「Theremin days」がモスクワ音楽院、テルミンセンターにおいて開催された。テルミンの演奏者、設計者、テルミンを用いる演劇者、テルミン氏の旧友など、ロシア国内外から多数の参加が得られた。アナログミュージックシンセサイザーの歴史や自身の現代版テルミンについて講演したロバート・モーグ氏や、演劇分野でテルミンを活用するLee & Dawes（イギリス）、LUX FLUX（オーストリア）のステージパフォーマンス、ドキュメント映画「Theremin: an

electronic odyssey」（ステイーヴ・マーティン監督）、「Soviet Faust」（プラト・ガレーエフ監督）、「Not more, not less」（セルゲイ・ゾーリン監督）の上映など、幅広い分野における活動が紹介された。最終日にはモスクワ音楽院内ラフマニノフホールにおいて記念コンサートが開催され、4名のテルミン奏者による、クラシックから現代曲まで幅広いレパートリーが披露された。筆者もこの記念コンサートに出演し、リーディア・カヴィナ氏とのテルミンによる二重奏等を試みた。

おわりに

社会主義革命、世界大戦、冷戦、ソ連崩壊。激動の時代はレフ・テルミン氏の人生そのものであった。そんな時代の記憶とともに、過ぎ去りつつあったテルミンが、再び甦ろうとしている。

76年も昔に発明された楽器が、現代のニーズに応えているのも、懐古趣味からだけではないだろう。いびつに進化し続ける現代の電子楽器にはない、曖昧でありながら厳しい、人間と楽器との関係をテルミンは有しているように思われる。

日本においても今後、より多くのテルミン演奏家、製作者が現れてくれることを期待している。

参考文献

- 1) Galcyev B.M.: "Sovetskii Faust" (Kazan: biblioteka jurnala "kazan" No.9-12/94,1995) p.21
- 2) Theremin L.S.: "Fizika i muzykal'noe iskusstvo" (Moscow: Znaniye 1966) p.6
- 3) Galcyev B.M.: "Sovetskii Faust" (Kazan: biblioteka jurnala "kazan" No.9-12/94,1995) pp.10-11
- 4) Smetanina N.: "Sinusoida Termena" (Moscow: Narodnaya gazeta Nov.27,1993)
- 5) Osipovich E.: "Golos Termena" (Moscow: Medvedi No.1-2,1996) p.123
- 6) Osipovich E.: "Golos Termena" (Moscow: Medvedi No.1-2,1996) p.125
- 7) Osipovich E.: "Golos Termena" (Moscow: Medvedi No.1-2,1996) p.125
- 8) Afanasiev E.: "Golos Termena" (Moscow: Chudesnaya priklucheniya No.6,1992) p.12